

Angel Beats! Operation Monstrum

まっき～

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死後の世界に影が現れ始めてから数日、影の危険性を把握したゆりは、オールドギルドにいるチャーに指示を出した。チャーは指示されたものを作り上げ、完成した。

チャーから完成したとの報告を受けたゆりは、死んだ世界戦線のメンバーを集めるのだった。

この作品は、Angel Beats!とMonstrumのクロス作品となります。

Monstrumは、とある人の実況動画を参考にしています。

文章にする際に違和感が生まれてしまうかもしれませんが、そこはご了承ください。

また、この話にはいくつか矛盾点があります。

1. 岩沢、ユイは死後の世界から消滅してない。

2. 高松はNPC化していない。

他にもあるかもしれません。

作者は文才0、不定期更新です。

その点もご了承ください。

※申し訳ありませんが、更新停止します。

もし要望があつたら再び書き始めることにします。

目次

プロローグ

1

1 組目

4

## プロローグ

影が現れてから数日後、音無たちはゆりによって校長室に招集された。

ゆ「よく集まったわね。それじゃ、今回のオペレーションについて説明するわ。今回のオペレーションは、モンスタームよ」

音「モンスターム？」

聞きなれない名前に、一同は首を傾げた。

日「それってどんなオペレーションなんだ？」

ゆ「私たちは元々神と戦うことを目的としていて、今は神だけでなく影もね。わかっているとは思うけど、いつ、いかなる敵が出てくるかわからない。だから…」

日「だから？」

ゆ「いかにその敵を回避するのかを…」

日「いや、回避するのかよ!!」

戦うと言っているそばから回避すると言い出したゆりに日向はツツコミを入れる。

ゆ「いいじゃない。余計な戦いは誰だつていやでしょ？」

野「なに、襲ってくるなら叩き潰すまで」

ゆ「野田君は今黙ってて。話がややこしくなるわ」

日「ややこしくしてるのはゆりっぺだろ？」

藤「なあ、ゆりっぺ。俺たちはいったい何をすればいいんだ？」

ゆ「そうね、話すより実際に見せる方がわかりやすいわね。それじゃ、ギルド跡地に行くわよ」

音無たちはゆりに連れられてギルド跡地に向かった。

日「な、なんじゃありやあ!？」  
ゆ「見ての通り、巨大な船よ」

ギルド跡地にあつたのはなぜか船だった。

野「つまり、これをぶっ壊せでもすればいいのか？」

ゆ「違うわ。みんなには何人かでここに入ってもらわう」

大「ええーっ!!こんな不気味で薄暗いところに入らなきゃいけないの!？」

ゆ「そうよ。詳しい話はこれからチャーに説明してもらわうわ。それじゃ、よろしく」

ゆりがチャーを呼ぶと、チャーはその船から出てきた。

チ「ああ、いいタイミングだ。ちょうど調整も終わったしな。お前たちにはこの船に入って乗り物を修理して脱出してもらおう」

日「なんだ、脱出だけかよ。というか、俺たちには乗り物を修理する技術なんかないぞ?」

チ「それなら安心しろ。そうだと思って簡単に修理できるようにしておいた」

日「いやいや、そういうことじゃなくて…」

チ「それだけじゃない。ここにはモンスターが存在する」

チャーの発言に全員が息をのむ。

高「モンスター…ですか」

野「フン。そんなもの、叩き潰してくれるわ」

チ「やれるものならやってみな」

ゆ「簡単だけど説明はこれで終わりよ。それじゃ、このくじを引い

てちょうだい」

ゆりがそう言いながら、手に持つくじを見せる。

松「それであたりを引いた人物が船に出向くってことであっているか？」

ゆ「その通りよ」

T「It's so crazy」

ゆ「さて、誰が当たるかしらねえ…」

## 1 組目

ゆ「決まったわ。最初は野田君、高松君、日向君、TKの4人よ」  
ユ「アホですね、アホばっかりのメンツになりましたね」

ゆりの一言にユイが小言を漏らす。

音「なあゆり、こんなので大丈夫なのか？」

日「大丈夫だ。俺がこいつらをまとめてやんよ」

ゆ「どうでもいいけど、メンツがメンツだからむきすぎて吐きそうね、ひどすぎるわ」

日「待て待て待てーい!!いくらなんでもその言い方はないだろうりっぺ!!」

野「ふっ、俺がすべてぶっ飛ばす」

高「時間も惜しいですし、そろそろ行きましようか」

T「OK. Let's go」

そして、4人は船の中へと入っていった。

### ——船内——

日「へえー。結構立派に作られてるんだな」

高「ところで、私たちはこれからどうすればいいのですか?」

日「さっきの話聞いてなかったのか? 乗り物の修理だよ」

野「モンスターが来たらどうする?」

日「そんなときやお前に任せるよ」

日向たちがそんな会話をしていたら、不意にスピーカーの音が入る。

ゆ「いいわね、バカとも。今から約3分後にモンスターが現われるわ。そのモンスターから逃げつつ、乗り物を修理して帰ってきなさい。それじゃ、オペレーション・スタート!!」

高「始まりましたね」

日「とりあえず進むしかねえか…」

T「Oh. It's dangerous」

——約2分半後——

日「なんだ、この大きな缶は？」

日向が見つけたのは大きな缶を3つつなげたようなもので、側面には黄色い三角に！マークが入っていた。

高「おそらく、酸素ボンベのようなものじゃないでしょうか」

高松はそれを酸素ボンベと解釈したようだ。

日「そうか。それと、なんか音が聞こえるんだが…ってTK、お前が持つてるのは？」

T「Fooooo!!」

高「おそらくラジオでしょう。音楽が流れていますから」

その時。

——ガシャン……——

野「何か音がしたぞ…」

日「だな。ここは慎重に行くぞ。TK、ラジオをとめ…」

T「Come on. Let's dance!!」



あろうことかTKはこの状況でダンスを踊る気のようにだ。

日「いや、なんでこんな状況で踊ろうとしてんだよ!!踊ってる場合じゃないぜ!!なんか音が近づいてきてんだよ!!とりあえず、部屋から出ていこうするぞ」

高「なんか、右側から光っているものが見えますが…」

野「上等だ、こっちまで来い」

日「アホか、今は逃げるぞ。っておいTK、いい加減ラジオを止め…ろ?」

何かに照らされ、日向はその方向を向くと、目を光らせた謎の大きな生物(?)がいた。

T「Somebody screem!!」

日「なっ…、なんじゃありやあ!!」

野「へっ、かかつてきな」

高「いい肉体美だ…。私も負けてられないですね…」

——モニタールーム——

ゆ「アホだ、こいつら…」

音「日向のやつ、結局まとめられてないじゃんか…」

ユ「やっぱリアホはアホでしたね」

ほとんど全員の人物が行動に呆れていた。

——船内——

野「くらえ!!(キンッ!!)んなっ?!ハルバードが効かないだどっ!」

T「It's very strong enemy」

日「厄介だな、とりあえず逃げるぞ!!」

野「このっ(ガシツ!) くっ…こいつ…(ゴキツ)」

逃げずに挑んでいた野田が謎の怪物に首を掴まれ、ものすごい力で首を折られた。

日「野田ああ!!」

高「逃げるしかなさそうですね」

日「そうだな。ってTK、早くラジオを…」

T「Ouch!」

身を隠そうとして曲がったとき、TKが躓いてラジオがどこかに飛んでいった。

日「なんか、どつかに飛んでったな」

高「おや、あの怪物はラジオの飛んでった方向に向かっていったようですね」

日「本当か?ふう、助かった…」

——モニタールーム——

ゆ「あら、何かに気付いたようね」

音「いい傾向じゃないか。さつきまで苦戦してたようだが、クリアできるんじゃないか?」

大「でも、まだ情報が音だけじゃ足りないと思うよ」

音「もしかして、これって先に行った人は不利なんじゃ…」

日「お前ら、戦う準備はできたか？（ボンベ）」

高「ええ（ヒューズ）」

T「OK（ファイヤーガン）」

日「それじゃ、音を鳴らすぞ…」

日向は持っていたコップを落とす。

——パリン——

日「来たぜ、あのデカブツだ!!」

高「この肉体、あの化け物と戦うために作り上げたものですから!!」

T「OK・ F o o o!!（バンツ）」

——パシツ——

日「え、それ効かないのかよ!!」

T「Oh no.（ゴキツ…）」

日「TK!!」

TKも野田同様に首を折られてしまった。

高「このままだと全滅ですね…」

日「くそつ、いったいどうしたら…」

高「私が行きましょう。あなたは逃げてください」

日「だが高松…」

高「あなたはもうわかっているのでしょうか、もうクリアすることはできないと…」

日「い、いや…。そんなことは…」

高「もちろん私も死ぬ苦しみを味わいたくはありません。ですが、この肉体で戦えるなら本望!!」

日「高松…」

高「さあ、逃げてください!!」

日「…任せたぞ、高松」

日向は高松を置いて走り出し、高松は着ていた服を投げ捨てた。

高「私が鍛え上げたこの肉体美で、負けることなど（ゴキツ…）」

日「高松!!」

——モニタールーム——

ゆ「全滅確定ね」

音「なんで戦おうとしたんだあいつら…」

椎「あさはかなり…」

藤「ところで、あれに勝てる術はあんのかよ、ゆりっぺ?」

ゆ「何回か言ってると思うけど、今回の目的は戦うんじゃないって回避よ」

音「根本を忘れてるのか」

——船内——

仲間をすべて失った日向は若干自棄になっていた。

日「こうなったら意地でも脱出だ。ここから飛び降りて水の中でボンベを…とうっ!!（それにしても、酸素ボンベの割には缶とか先端の形とかおかしいが、まあいいか。スウ…）ンゴボバア!!」

日向は結局ガスボンベを酸素ボンベと勘違いしたまま使用した。

——モニタールーム——

ゆ「アホめ、船から逃げるだけならまだしも、自殺まがいなことをするとはね」

音「というか、ガスボンベを酸素ボンベと間違える時点でどうかと思うぞ」

ゆ「まあ、期待してなかったし、考えても仕方ないわ。それじゃ、皆を回収するわよ」